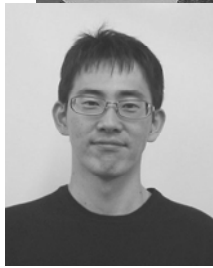


沖縄八重山文化研究会会報

第 230 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三一六
Tel. 〇九八・八八二・五〇四三



第二三〇回沖縄・八重山文化研究会は、二〇一二年二月十九日、県立芸大付属研究所内で開かれ、鈴木耕太氏（沖縄県立芸術大学博士後期課程）が発表した。

八重山に残る組踊台本について

—石垣島を中心に—

鈴木 耕太

1. 現存する組踊写本

一九八七年に沖縄県教育委員会の行った組踊調査によると、県内・県外には組踊写本（組踊集のように、いくつかの演目の台本を合冊しているもの）は三五本現存している。明治末期より出版された活字台本も合わせると、戦前期には多くの組踊台本が残されていたことが想像でき、戦争によって多くの資料が失われたにもかかわらず、組踊台本は比較的多くの資料が戦火をくぐり抜けてきたことがわかる。

上記の調査以後に大き組踊調査はされていないが、先行研究者の調査や、筆者の個人的な調査を重ねた結果、新たに発見された組踊写本は四本ある。石垣島に残っている

た『伊舎堂用八所蔵本』、台湾大学図書館に所蔵されていた『台湾本琉歌大観』と『田代安定所蔵組踊台本』、饒平名青年団が所蔵していて、現在は個人蔵となっている「高山敵討」である。

2. 八重山に残る組踊台本について

八重山に残る組踊台本は先に挙げた調査報告書と、先行研究によると『豊川家本』『伊舎堂用八本』『喜舎場孫進所蔵本』『新本家本』『八重山博物館所蔵本』の計五本あり、それぞれの台本は八重山博物館や石垣市史編集室などに所蔵されている。また、八重山の関係者が持っていた組踊台本は『宮良當壯所蔵本』と『宮良殿内文庫本』がある。『宮良當壯所蔵本』は東京にて保管されておられ、『宮良殿内文庫本』は琉球大学付属図書館に所蔵されている。合計七本の収録作品は作品の重複も含めると三六作品である。



<p>3. 特徴的な台本①『伊舎堂用八本』について</p> <p>『伊舎堂用八本』は八重山に残る組踊台本の中で、一番多くの作品を収載している組踊集である。書写年代不明であるが、近世末期には成立していたと推測できる。合計十一作品のうち、沖縄県内にも写本が残っていない作品が多く収録されているのが特徴である。すなわち、『仲村渠真嘉戸』《未生之縁》《月之豊多》《北山崩》《身替忠女》はこの台本にしか見られない。また、収録されている《執心鐘入》の台詞の一部が他の台本と大きく異なっている。以下に例を挙げる。その場面は《執心鐘入》でも有名な宿の女と若松との問答の場面である。女の恋の誘いを、若松が「知らん」ときっぱりと一言で一蹴する場面である。ここでの若松の台詞が『伊舎堂用八本』では「浮世恋てすや 聞見ちんしらぬ 頼て此事や ゆるちたふうれ」と、やんわりと断るような台詞になっていて興味深い。筆者の研究によると、『執心鐘入』は現存する九本の筆写本に収録されているが、競合したところ詞章・音曲の異同は少なく、かなりしつかりとした作品である。九本の台本を校合した結果、この部分の異同は伊舎堂本のみにみられた。</p>		<p>4. 特徴的な台本②『豊川家所蔵本』について</p> <p>『豊川家所蔵本』には、八重山に現存する組踊台本の中で最古の筆者作品が収録されている。それは《高山敵討》で、その冒頭に「道光三拾年庚戌□□正月十四日大浜親雲上御宅にて開□□」とあり、この記述から一八五〇年にこの台本が大浜親雲上宅にあった台本から書写されたということがうかがえる。組踊台本の多くはどの台本から書写された、という書誌情報が記載されていないことが殆どである。この『豊川家所蔵本』は組踊台本が他の台本より書写されたことがわかる唯一の事例であり貴重である。</p>
<p>5. まとめ</p> <p>八重山に残る組踊台本を俯瞰してみると、『仲村渠真嘉戸』《未生之縁》《月之豊</p>	<p>また《銘苺子》には配役が記されており大変貴重である。八重山に残る組踊台本のうち、配役が記載されているものはこの台本のみである。配役の名前が首里士族のものであり、書写もとの台本が首里で作成されたか、もしくはそれを書写したものであることがうかがえる。残念ながら、現段階では、この配役にあてられた人物が誰であるかを特定するには至らなかった。今後、筆を改めたい。</p>	
<p>な存在であったということがわかるだろう。</p>	<p>八重山に残る組踊台本には、豊かなレパートリーが垣間見える。そして、現在では組踊の上演がほとんど行われなくなった八重山には、これだけ多くの組踊台本が現存している。それは八重山士族が「教養」として組踊を受け入れた結果であろう。このような八重山の視点をを用いて沖縄本島を見渡せば、戦前は現在よりもはるかに多くの組踊台本が現存し、士族にとって組踊は身近な存在であったということがわかるだろう。</p>	<p>多》《北山崩（伊舎堂用八本）》《身替忠女》《多津山敵討》の筆写本は八重山にしか見られない。《多田名大主（多田名組）》の写本は多良間と八重山のみにもみられる、ということがわかる。これらはすべて王府上演が認められない組踊である。今後、研究を進める中で、これらの作品が王府上演されたという資料を発掘することも大事であるが、近世期において王府の手を離れた所（沖縄各地）で組踊が創作されている可能性を再考する必要がある。なぜなら、伊江島で道光十九（一八三九）年に上地太郎によって創作されたと言われている《忠臣蔵》や、光緒十五（一八八九）年の台本がこの作品の最古の台本であるが、それ以前に創作されていたと伝わる多良間の《忠臣仲宗根豊見親組》など、近世の琉球において組踊が地方で創作されている事例が実際に存在しているからである。</p>

文化短信

南山舎 やいま文化大賞を創設
県内初、大賞作品を出版

今年、創立25周年を迎えた日本最南端の出版社・南山舎（上江洲儀正代表取締役）はこのほど、記念事業として「南山舎・やいま文化大賞」の創設を発表した。

八重山をテーマにした学術論文（自然科学、人文科学、社会科学）、評論、ノンフィクション、紀行文、エッセーなど未発表のオリジナル作品を個人、グループから広く募集、大賞作品は南山舎から出版される。上江洲代表は「八重山の応援団として島じまの情報や歴史、文化などを発信してきた。その恩返しになればと思う。気軽に誰でも応募できるようにした」と述べ「八重山を突き動かす原動力になるような作品、新たな発見ができるような作品が多く集まってほしい」とした。

選考委員は波照間永吉県立芸大附属研究所教授を委員長に砂川哲雄、大田静男、島村賢正、上江洲代表の五氏。応募締め切りは、二〇一二年十二月一〇日。来年三月に受賞作品を発表し、四月に表彰式を行う。問い合わせは南山舎。

「沖縄の古謡」CDを発売
西表、波照間、新城の三三曲を収録

沖縄県文化振興会は沖縄の優れた文化遺産である古謡を記録保存し、後世に受け継ぐと「沖縄古謡保存記録事業」を立ち上げ、八重山、宮古、本島とその周辺離島の古謡を現地録音しCD化し、販売しているが、このほど第二弾として「沖縄の古謡 八重山諸島編・中巻」西表・波照間・新城」が販売された。

西表島干立の「櫂ぬ手」、祖納の「米稔らばのユングトウ」、船浮の「くみぬ鳥」、波照間島の「びていそりジラバ」、新城島上地の「真謝みやらび」、同島下地の「神舟のジラバ」など、三線が民衆に広まる以前から歌い継がれてきた珠玉の名曲、全三三曲が収録されている。

サンゴウイークがスタート

サンゴにちなんだ多彩なイベントで八重山の豊かな自然環境を楽しむ「石垣島サンゴウイーク」（同実行委主催）このほどスタートした。

同ウイークは、サンゴ礁の保全やエコ・グリーンツーリズムの普及、次世代の人材

育成などを通して、世界に誇る石垣島の大自然と観光産業が調和した新たな観光メニューを創出することが目的。初日の三日は名蔵アンバルや熱帯雨林に自生する植物などの観察会を楽しんだ。同ウイークは「サンゴの日」の三月五日をはさみ、一〇日までの一週間行われ、海岸清掃やヨットで世界一周の旅を果たした前田博氏の講演会、サンゴ増殖・観察プログラムなど多彩なイベントが行われる。

竹富方言を語り継ごう
郷友会青年部が研究集会

竹富方言についての講話とワークショップ「テードウンムニユ 使イオーラ」（石垣竹富郷友会青年部主催）がこのほど大浜信泉記念館で開かれた。

前新透氏の『竹富方言辞典』を活用して竹富方言を後世に語り継いでいこうという取り組みで、県立芸術大学付属研究所教授の波照間永吉氏、全国竹富島文化協会理事の高嶺方祐氏、竹富島の祭祀行事の撮影を行っている入里照男氏が講演した。

会場には大勢の郷友会員らが来場。各講演に熱心に聞き入りながら、ワークショップを通じて竹富方言の使い方を学んだ。

新刊紹介

島じま篇刊行

『竹富町史 第二巻 竹富島』

竹富町史の本編である第二巻・島じま篇の最初の本である『竹富島』がようやく刊行された。

竹富町は島嶼県といわれる沖縄県においても、町域に一六島を持ち、うち九島の有人島を抱える。「町史」とひとくくりにするが、広大な海域に浮かぶ独立した島、時には孤立した島々は、島ごとにちがった自然や風土、歴史の歩みがあり、その多彩な相貌を描き出すこと自体が「竹富町史」の他の地域史にはない最もユニークな点といえる。その意味でも本書はまさに本編であり、待ち望まれていた書である。

竹富島をまるごと味わえる一冊である、と書くとガイドブックの宣伝文句のようであるが、竹富島の自然・歴史・信仰・民俗・芸能・人物に至るまでの記述がなされた、百科事典とでもいえるべき本である。

十八人に及ぶ執筆者のほとんどが島の人大人というのも本書の特徴の一つだろう。竹富の人たちが竹富島のために作るという編集方針のもとで作られた本書は、島の人が

執筆している章が多いのは当然であるが、それに加えて研究者が執筆した章も織り込んでおり、最新の研究成果もうかがえる質の高いものになっている。

本書は、第1章「集落と自然」に始まり、「歴史と伝承」「教育」「人と暮らし」「信仰と祭祀」「人の一生」「言語伝承」「竹富島の芸能」「人物」「年表」、の一〇章、総頁数七〇〇頁と大部の書であるが、一つ一つの章は細かく見出しが立てられていて長いという感じはしない。

本書の三分の一強を占める第2章について少しふれてみたい。まず「伝承にみる竹富島」で島のもっとも根源的な六つの御嶽であるムーヤマの成立についての論考があり(狩俣恵一)、「アカハチ事件・蔵元と三間切制度・人頭税・明和津波など、古琉球期から近世の竹富について、島に軸足を置きつつも首里王府とのからみにも目を配った平易な記述で島びとのたくましい暮らしぶりを描き(得能壽美)、異国船来琉から琉球処分・廃琉置県と続く時代の転換期、その背後にある欧米列強の東アジア再編というダイナミックな動きのなかで、首里王府が、八重山がどのように対応したか史料にそって具体的に記述し、竹富島もまた時代に翻弄されていくさまを記す(西里喜行)。大正期から昭和期は竹富村頭の日記を援用しながらさまざまエピソードを並

べて時代の諸相を描き(阿佐伊孫良)、戦争(富田哲)では日清・日露戦争に始まる島の戦死者の横顔や被害の状況を丹念な聞き取り調査によって記している。

欲を言えば、たとえば近現代史はエピソードや事象の蓄積の上に、さらに時代状況を分析し沖縄や日本と切り結んだ実証的な研究成果をも期待したいし、すべての島じま篇が刊行されたときには、自然や言語について、島単独ではなく、各島の共時的なあり方や比較の試みを読んでもみたいと思うのだが、それは次代への課題であろう。

島びとの地域に対する熱い思いに研究者を巻き込み、その成果を活用して島の若い書き手を育てていくのは一種の理想論ではあるとしても、本書はそれに向けて一歩を踏み出した「町史」といえよう。他の島じま篇が南の海のなかから装いも新たに浮かび上がってくるのを期待したい。

(B5判、七〇〇頁、竹富町役場、頒価三〇〇〇円十税)

次回のお知らせ

★六月十七日(日)午後五時〜七時

★県立芸大附属研究所2F

★講師・演題は追ってお知らせします。